

■ 講演会報告 ■

「木村利人先生との集い」

～バイオエシックス研究の深化と促進をめざして～

日本生命倫理学会の第7期代表理事に木村利人先生が選出されたことを受け、学会事務局長に就任された鈴木利廣先生の呼びかけと箕岡真子先生の協力により開催された講演会の報告です。今後のバイオエシックスの展開や若手研究者のネットワークの充実、そして第21回生命倫理学会年次大会へ向けての具体的指針について、木村門下生をはじめ学術関係者が集い、課題を共有しました。

<日時> 2009年1月31日(土) 15時～17時

<場所> 明治大学駿河台校舎 研究棟4階 第7会議室

<講師> 木村利人 先生 (恵泉女学園大学学長)

<オーガナイザー> 鈴木利廣 先生 (弁護士、すずかけ法律事務所)

参加者：15名 (足立智孝、今村由幾、掛江直子、川上祐美、河原直人、清塚理江、栗原純子、佐伯恭子、角田ますみ、空閑厚樹、窪田共和、前川健一、箕岡真子、山下太郎、横瀬利枝子〔敬称略・五十音順〕)

■発起人挨拶・・・箕岡 真子 先生

最近バイオエシックス(生命倫理)という言葉に代わって“倫理”と言う言葉が多く使われています。実際、先日分担執筆した本でも、出版社から、バイオエシックスではなく‘倫理’という言葉でお願いしますと言われました。しかし、‘バイオエシックス’と‘倫理’は言葉が違うだけではなく、底に流れているものが違うように感じます。倫理は最低限守るべきことを上→下へ教えるイメージがありますし、バイオエシックスは、命に関わるいろいろなことに市民が問題意識をもち、皆で考えていこうという姿勢をもっているという感じがします。

私たちは木村先生からお教えいただいたバイオエシックスの灯を消さないように、バイオエシックスの伝道者として何をしたらよいかを、本日は皆で考えていきたいと思ひます。

■講演要旨・・・木村 利人 先生

今日は大変に懐かしい顔ぶれの皆さん方にお会いできて大変嬉しく思います。

いつものように、たくさんの資料や新聞記事を持ってきたのですが、今日はまず、清水書院から出版されている高校の教科書『現代倫理』の中に、バイオエシックスの内容がはっきりと書かれているので、それを皆さんに紹介したいと思います。「第2編 現代社会と倫理」の「第1章 現代に生きる人間の倫理」の中には、「人間の尊厳と生命尊重」「科学と人間」の節があり、「第2章 現代の諸課題と倫理」には、「生命科学と倫理」「地球環境の危機と倫理」といった内容が盛り込まれています。また『新版・現代社会』（実教出版）の教科書でも第3章は「科学技術の発達と生命」で、1. 現代医学が問う生と死のあり方、2. 脳死と臓器移植、3. 遺伝子技術と生命となっており、ヴィジュアル特集には、「クローンの誕生と生命のゆくえ」が取り上げられています。いずれの教科書でも生命倫理、バイオエシックス、インフォームド・コンセントなどの用語が解説されています。これは30年前には全く存在しなかったものであり、あきらめずに長年言い続けることによって、社会が変わり、学校教育の教科書も新しい時代にふさわしい内容に変化せざるを得ないことの象徴であるといえます。

次のことはしばしば皆さんにお話しましたが、30年前に私が日本の医師会や病院などに講演に招かれた折に具体的な提言をしても、たとえば、「インフォームド・コンセント」などは日本になじまないし、このカタカナ用語は絶対に日本の社会に定着するわけがない。「患者中心の医療」などとんでもない、「医師中心の医療」でなければならないと、当時の日本医師会会長の武見太郎医師にも直接言われました。ところが、武見会長が晩年がんにかかって入院し、退院時の記者会見では「これからは患者中心の医療であるべきだ」と言われたのです。全く、易经にある「君子は豹変する」そのもので、患者となった自分に都合が悪くなると、それまでの考えを一変させたというわけです。しかし、この「患者中心」という言葉が新聞記事に登場したので、結果的にはとても良かったと思っています。とにかく私たちが言い続けてきたことによって、そして医療の現場で、具体的に実践されることによって、伝統的でパターンリスティックな医療にチャレンジして、「インフォームド・コンセント」も大変に広まり、もはや常識となりました。これらのほとんど全部の倫理や社会の教科書には、必ず記載されるようになったという例でもわかるように、わたしたちは、時代の価値観や社会の動向を変えることができるのです。

日本人にとってはこの「社会が変わる」ということは、終戦の日のたった一日に、ラジオと新聞を通して経験したことでもありました。本当に、それまでに絶対とされていた天皇中心の価値観や倫理が完全に瓦解したわけでした。そういった意味で、バイオエシックスとマスメディアのあり方も非常に重要なテーマです。とくにテレビ番組の報道などでは、収録した私のコメントの内容を後で編集されてしまって、一番言いたかったことが切り取られてしまうということも多々ありました。ですから、私がインタビューを受けるときには編集されないように、25秒の収録時間ならきっかり25秒だけ話すようにして、長く話し

たものを後からあちらこちらをつなげて編集できないようにしているのです。今後皆さんもそのような機会がたくさん出てくると思うので、気をつけてください。

今日ここに持ってきた資料の中でとくに最近私が書いた論説としては、『キリスト新聞』の「論壇」の、『『空爆の悲惨』と『明日への遺言』』（2008/4/12）、「高齢者のいのちの人権」（2008/6/12）などがあります。

さて、2006年以降、私が学長を務めている恵泉女学園大学は、プロテスタントの学校なので、そこでは、「現代社会とキリスト教」という講義を担当しています。バイオエシックスの様々な問題を、キリスト教の視座から考察し、学生の報告発表やグループ討論をしたりしています。恵泉女学園大学では、1988年の開学以来「生活園芸」が必修科目となっているので、自然を慈しみ、野菜などいのちを育てる実習を行っています。従って、バイオエシックスと環境倫理の問題もとりあげるなど、いのちの問題をめぐってユニークな大学教育を行っています。恵泉教育の3つの教育理念は「聖書」「国際平和」「園芸」ですが、いずれも「いのち」がこれらを統合するキーワードなのです。いのちの源としての「聖書」の教え、いのちの支えあいを実現する「国際平和」、そしていのちを育てる「園芸」ということになると思います。その意味で、恵泉女学園大学でのバイオエシックス教育は、国外や国内での体験学習や生活園芸の実習などへの広がりを持っていることに特徴があります。

この恵泉女学園大学における「体験学習」と「生活園芸」教育プロジェクトはそれぞれ、2006年度と2007年度において文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」に2年連続で難関を突破して採択され、研究・教育助成金を獲得できたのは大変に嬉しい事でした。

ところで、私の新しい本も持ってきたのですが、皆さん知っていましたか？『いのちのバイオエシックス—環境・こども・生死の決断—』（コロナ社）です。これは昨年2008年の夏に出版されたばかりで、ご存じなかった方はぜひ読んでみてください。

それからもう一冊紹介したい本があります。これは、『キープさん—ある少年の戦争と平和の物語』（近代文芸社・2006年）という題ですが、これは私の戦争中の学童疎開体験や軍国少年教育、そして戦後の進駐軍の将校との出会いなどの経験談をもとに私のパートナーがまとめたものです。いわば、私のバイオエシックスのルーツのストーリーですので、お読みいただければ幸いです。

昨年秋に、九州大学医学部で行われた日本生命倫理学会の第20回年次大会では、「医学・医療と生命倫理」という大会テーマのもと、第二次大戦中に行われた、いわゆる「九大生体解剖事件」について、当時の最後の生き証人である東野利夫先生が特別講演をされて、参加者一同に大きな感銘を与えました。実は、この「キープさん」という本には、終戦後私が中学生の時に会ったアメリカ軍の将校—その人がキープさんという名前だったので—のことが書いてあります。憎き敵国の兵隊だと思っていたアメリカ人に、とても優しくしてもらったのをきっかけに、その後私はキープさんと親交を深めていきました。最後に再会したのは40年もの後で、神父になって病院で末期の患者さんのスピリチュアルケア

をなさっておられたキーフさんと時間の空白を埋めるように昔話に花を咲かせ、更に共通するバイオエシックスと生と死のケアについての話しをすることができ、時間の経つのを忘れるほどでした。

40年後にキーフさんとアメリカで再会し、お話していて驚いたのは、当時総司令部の民間情報教育局（CIE）のスタッフだったキーフさんは、実はもう一つの秘密の任務があり、それは旧日本軍の七三一部隊の隊員の尋問と調査を行ったと語ってくれたことでした。本人の話だけで、その事実を確認する名簿などの資料が見つからないので、この「キーフさん」という本にはそのことをまだ入れてありません。今日初めて、このことを皆さんにお話ししています。

いつも、皆さんに言っていることですが、大事なものは原典、原資料にあたるということです。そして、他の人が見てもきちんとその資料に辿り着けるような書き方をしておくということが大事です。私は、アメリカのメリーランド州ストランドにある米国立公文書館で七三一部隊の秘密文書を探し出し、それをもとに論文を書きました。七三一について調査をしている幾人かの方々から、私の引用文献・注をたどって、アメリカに出かけ、原資料をみることができましたとのお話をお伺いして、役にたてて嬉しく思っています。

皆さん方はおそらく、常に完全なものを書こうと思うと論文の発表をしばしば躊躇してしまいがちかと思いますが、たとえ不完全に思えても遠慮しないで、その時点でやれる範囲で、堂々と恐れずに研究成果を発表していくことが大切です。その場合、考え方の **originality** を大事にするとともに、必ず原資料、原典にあたり確認することが大事です。

今度、私は日本生命倫理学会の会長に就任しまして、昨秋の年次大会では日本におけるバイオエシックスの新しい展開をめざして、バイオエシックスにおける学問の伝統的な領域を超えた超学際的な **Collaboration**（協働）の必要性、そして、大胆に緊急のバイオエシックス的課題に直面しての問題提起と問題解決を提示する **Courage**（勇気）、最後に、不正の構造への変革の **Challenge**（挑戦）を通し、バイオエシックスの未来を目指し、世界をリードするバイオエシックスの学問・教育・運動・公共政策の形成を訴えました。

多くの会員の皆さん方が作り出してきたバイオエシックスを更に大きく展開する時が来ています。そしてその担い手は、ここにおられる方々を初めとした、新進気鋭の研究者である皆さん方なのです。

日本生命倫理学会会長として、私は鈴木利廣先生に事務局長としての重要な任務について下さるようお願いしました。そして先生が、その事務局長としての職務をご快諾して下さいましたことは本当に嬉しいことです。

以前私がアメリカにいた時にも、日本のいろいろな医療の状況や法律のことなど、鈴木先生にアメリカから問い合わせをすると、判例を含めて膨大な資料をすぐにアメリカ宛に送っていただいたりしまして、大変にお世話になっておりました。日本でバイオエシックスが始まって約30年ですが、その間、鈴木先生は私の非常に大切なパートナーであり、また、先生の薬害エイズ裁判などのご活躍を通して多くのことを学び、教えられてきています。

さて、今日の会では、今年の第21回年次大会に向けて、皆さんの方からもいろいろと提案をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。どうも有り難うございました。

■ディスカッション要旨報告

1. 学会の社会的役割とはなにか

Q. (前川健一さん) 米本昌平先生は、韓国の生命倫理学会の対応を引きあいに出して、日本でも学会が法整備やガイドライン作成に主導的な役割を果たすべきだと主張されています(米本著『バイオポリティクス』など)。今後の学会の在り方として、どのようにあるべきだとお考えでしょうか。

A. (鈴木利廣先生) これは理事会などでも議論になったことですが、学会として一律に一つの方針を打ち出すということは現状では難しいと思います。ただ、社会的に重要な問題については、学会として論点整理を行うという形で社会的責任を果たしていきたいと考えています。

2. 患者さんの声を直接反映する場として

Q. (清塚理江さん) 当事者の人たちにもっと参加してもらえるようなワークショップやセッションがあるといいと思います。発表者は研究者だけではなく、取り上げられている問題の当事者が入ることで、問題に対する理解が深まると思います。

A. (鈴木利廣先生) 生命倫理学会では、昨年の九州大会より、従来の「ワークショップ」の代わりに「公募シンポジウム」と称して、応募者自らがテーマや発表者をオーガナイズして応募するという形式をとっています。そこでは、オーガナイザーが推薦する発表者は、必ずしも学会員でなくともいいので、そこで患者さん自身に語っていただくことが可能になります。

3. 座長・オーガナイザーの役割

Q. (佐伯恭子さん) 私は去年の年次大会でシンポジウムのオーガナイザーを経験したのですが、座長は質疑しやすいような雰囲気にもどどのようにもっていったらよいでしょうか？また、座長経験が少なく不安を持っている人などの希望者向けに、座長講座などがあれば、ぜひ参加したいです。

A. (鈴木利廣先生) たとえば、「あまり時間がないですが.....ではお一人だけ質問どうぞ」というより「時間はたっぷりあるのでどうぞ」のほうが良いですね。発表時間と質疑応答時間の比率は、少なくとも1:1くらいは必要でしょう。若手の人を中心に座長を依頼して、事前に座長のための研修会を開くとか、研修制度などを学会が開催して、研修修了証明書のようなものを出すという提案もあり得ますね。それから、学会後の座長報告は、質疑のポイントや論点を明確にし、議論の臨場感が伝わるようにする必要があります。

■総括・・・鈴木 利廣 先生

昨年で学会は満 20 年を迎えました。木村代表理事の下で、次の 20 年を展望して、3 年間の任期中に若い研究者の方々の力を活かせるような学会運営に努力したいと考えています。代表理事の提唱する 3 つの C（前出）を併に実践しましょう。

（文責：バイオエシックスを考える会）

【木村先生の新著の紹介】

『いのちのバイオエシックス —環境・子ども・生死の決断— 』

(ヒューマンサイエンスシリーズ 11)

コロナ社 (2008/07)

木村利人、掛江直子、河原直人 編著
早稲田大学人間総合研究センター 監修

<概要> 科学技術の発展とともに、バイオエシックスはいつも新しい課題に直面し、挑戦し続けている。このバイオエシックスの軌跡を「環境・自然」、「子どもの医療」、「生死の決断」等、私たちのいのちに関わる重要なテーマに焦点をあてて検討、考察し、問題解決への提言を行った。

<目次>

序 バイオエシックスの歴史と展望 掛江直子 河原直人

第1部 環境・自然を考える

- 1 環境問題における思想の形成—田中正造の場合 牛山積
- 2 「自然」の破壊を避けるため—いのちの公共政策とバイオテクノロジー 木村利人

第2部 子どもの医療を考える

- 1 新生児医療における生命倫理—特に予後不良の児への対応 仁志田博司
- 2 小児医療とインフォームド・コンセント 森川功
- 3 小児医療における倫理—真実告知と子どもの権利 掛江直子
- 4 こどもの脳死臓器移植の方向性を考える 河原直人
- 5 「子を持つ自由」とは何か—生殖補助医療利用の法的規制をめぐる 岩志和一郎

第3部 生死の決断を考える

- 1 死についての自己決定とは—事前指示が医師介助自殺を含むとき 土田友章
- 2 日本において安楽死は可能か—刑法の立場から 曾根威彦
- 3 医師による自殺介助は可能か—北米における裁判の動向 富田清美 宮下毅 (補筆)
- 4 臓器の提供と脳死の自己決定の問題性—臓器移植法と臓器の摘出を中心として 曾根威彦
- 5 脳死と臓器移植をめぐる基本的な問題—日米比較的生物エシックス研究の視座から

ロバート・M・ヴィーチ 掛江直子 (訳)

